



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道大学植物園
Author(s)	眞崎, 睦子; MASAKI, Mutsuko
Description	北大施設探訪
Citation	リテラポプリ, 27, 15-15
Issue Date	2006-07
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/42595
Type	article
File Information	masaki_LP27-15.pdf



北海道大学植物園

言語文化部 眞崎 睦子



「あの植物園全体へどろりとマヨネエズをかけてしまえ」

昭

和二年五月、講演旅行の際に立ち寄った芥川龍之介は同行した「里見君」にこう言った。

日

本マヨネエズ学会によるとマヨネエズが一般に向けて発売されたのはこのわずか二年前であるから芥川家の食卓はハイカラだったのだろう。もしこれがマヨネエズ発売前だったら、植物園はお浸しか和え物にでもされたのだろうか、などと考えながら、七十九年後の同じ月、この施設を探訪した。

四

月二十九日に開園されたばかりのせい、か人影まだまだばらばら。正門から右へと順路を守ると目に入るのは大きな銀杏。ここで最初の衝撃。銀杏はその葉の形状から中国で「鴨脚(いちやお)」と呼ばれ、これが日本の呼び名の由来となったとある。確かにあの黄色い葉はアヒルの足だ。では北十三条の銀杏並木は「アヒルの足の並木道」だったのか。楽しい気分になったのもつかの間、北方民族資料室とこの植物園の設計者である宮部金吾の記念館で厳かに資料と向かい合う時。そう、ここでは植物以外のモノも来園者の知を刺激するのだ。

さ

て、あとはのんびり緑の中の散策を。いや私は、どうしても植物の名前や付された説明を一字一字確認し、これまでの人生に照らし合わせねば気がすまない。

オ

ンコがあちらこちらにある。私はこの木を見つけて「あ、これオンコですわね」と地元の人に話しかけるのがうれしい(違いますよ)と言われると悲しい。オンコとはイチイのこと。これがわかればちよつとした北海道通(だと

私は思う)。ライラックもまだ花の季節ではなかったが、その頃にまた来てね、と私を誘っているよう。あつ、エンレイソウ。

北大キャンパス内の美味しいレストランもエンレイソウ。マデインソンのアボリタム(樹木園)では、同行者がきまって「花びらが三方を指しているでしょ」と得意になっていた。誰もがこうやって思い出の植物の一つや二つに出くわすのだろう。祖母の庭にあったハマユウが懐かしい。「夏が来れば」と歌いたくなるミズバショウ。その横にはフトイ(他にいい名前はないのか同情する)。スズランの説明も衝撃であった。葉がギョウジャニンニクに似ているが、食べられないので「狐のギョウジャニンニク、犬のギョウジャニンニクなどと悪口を言う」。可憐なスズランの悪口を目にしたのは生まれて初めてだ。麗人の悪行を知らされたようで動揺した。

退

園十分前の放送を聞き、私は焦った。どうしても出葉が「必ず来る幸福」なのである。退園時間がせまる。受付窓口の職員の方からその植物がある場所を聞き出し、一目だけ見せてくださいとお願ひした(O下さん、ご恩は忘れません)。走った、走った。見つけた。私の「幸福」は、本州のそれより大きく明るくマヨネエズのかからぬ場所に上を向いて咲いていた。

こ

の植物の名前については、教育的配慮から、ここには書かない。私は杜子春が出会った仙人ではない。「幸福」は自分で見つけるものです。

(まささき むつこ)